

面子とハイラーキー

——台湾ルカイ族の首長制

山 路 勝 彦

1 はじめに

多くの台湾山地社会は世襲的な支配機構を欠いているのだが、南部のパイワン族とルカイ族はいささか異質であって、階層秩序を持つという特徴でこれまで知られてきた。これらの社会は、サーリンズ流に解釈すれば、首長制社会として位置づけられる。

ポリネシアの社会は、かなりの余剰生産物を産み出していて、その余剰物を分配する行政機構が整備されているのが珍しくない。余剰物を集積し、かつ分配する役割を負う人物、これがサーリンズのいう首長の定義である [Sahlins, M. 1958:4]。

むろん、一口に首長制社会といっても、その首長の果たす役割にはさまざまな変異がある。サーリンズにしてみれば、メラネシアは、首長というよりもビッグ・マンが指導的役割を果たす社会と位置づけられるが [Sahlins, M. 1963]、このメラネシア地域にも、首長制を支配的な統治手段としてもつ社会はある。パプア・ニューギニアの中央州のメケオ族はその一例である。

メケオ族では、首長（ロピア *lopia*）は平民（ウルル *ulalu*）と区別され、その地位に応じたさまざまな役割を担っている。ここでは、「戦時首長」と「平時首長」とがあり、さらに彼らの下位にも各種の役職者がいて、複雑な階層秩序を形成している。この首長は民衆とその祖先たちとの間にたつ仲介者的存在であり、呪力を持った司祭者でもあり、農耕を制御する呪術者でもある。民衆の代表者でもあり、彼らの福祉を求め、かつ争いを仲裁する人物でもある。とり

わけ、首長の特権は、儀礼や饗宴で指導的役割を独占することにあられる。主な儀礼は、「首長の家」でおこなわれるが、その家の柱には首長の標章が彫られている。そして大切な点は、そうした儀礼を実修するにあたって首長は、自己の名において余剰生産物を集積し、それを分配することにある [Hau'ofa, E. 1971:152-69, 1981]。まさに、この事実からすると、メケオの社会はサーリンズの描いた首長制社会とみなすことができる。

細かな地域の変差を除けば、ルカイ族の社会も、メケオ族の事例にみるような、あるいはサーリンズの定義した意味での首長制社会と同種な社会として位置づけることが可能である。しかしながら、ここで注意しなければならない点がある。それは、これらの社会が「首長」という同じ概念で括れるとしても、その概念を取り巻く社会的・文化的背景は異なっているわけだから、全体的生活事象を考慮しないかぎり、その概念は生きた実在として意味をなさなくなるということである。

本稿はルカイ族の首長制を分析することを第一の目的としている¹⁾。ただし、社会的・文化的背景を考慮した上での生活総体の記述は上に述べた観点からすれば必須の作業である。しかし、それらはこれから随所で展開していくルカイ族の記述誌で詳述されていくことだろう。いうなれば、本稿はその記述誌の一部に他ならない。

2 研究史にみる首長制

台湾南部のルカイ族、パイワン族に首長制が存在していることを最初に体系的に報告した研究は、大正10年に刊行された『番族慣行調査報告書』である。その書物の「五巻ノ四」では、「頭人」と表記された首長にまつわるいくつかの

1) 現在総称的に使われている名称、ルカイ族なる語彙はこの地域の自称詞としてあったわけではない。それは戦後になって使われ出したにすぎず、もともと彼らのことばではなかった。総称的にルカイ族というとき、高尾県茂林郷の住民のみならず、屏東県霧台郷、台東県卑南郷の人たちも、現在では言語学の立場から包括的にルカイ族と指称されている。それは、言語的共通性からである。これに関しては、エスニック・アイデンティティをめぐる問題として別に論じなければならないが、本稿では便宜的にこれら地域のすべてを一括してルカイ族として叙述したい。

重要な特徴が指摘されている。たとえば、首長の継承に関しては、これら地域では変差があって、ルカイ族では長男相続が基本であるのに対して、パイワン族では男女に拘らず初生子が首長の地位を嗣ぐことが指摘されている〔臨時台湾旧慣調査会 1921：15-6〕。

男であれ、女であれ、最初に生まれた子どもが首長家を継承するこのパイワン族の慣行は、調査者にたいへん関心を引き起こしたとみえ、その慣行を中心とした記述は、『番族慣行調査報告書』では「第五卷ノ五」として一冊の分量で上程されたほどである。そして、この報告を引き継いで、その後、多くの研究者がこれを主題とした調査を展開していくことになった。そしてルカイ族の慣行も含めて、台湾の研究は飛躍的に資料が集積されていった。たとえば日本人としては、岡田謙（1944）、末成道男（1973）、松沢員子（1979）、笠原政治（1988）、台湾側では、陳奇禄（1953）、衛惠林（1960、1963）、謝繼昌（1966）、石磊（1971、1976）、蔣斌（1983）、王長華（1985）などが何らかの形で首長制の研究に携わり、そしてそれぞれの業績を挙げていった。

パイワン族の首長制を取り上げてみると、確かにその継承方法や家族組織との関連でみると、きわめて独自の存在であるのがわかる。しかしここでは、もっと一般的な首長制の特色を検討しておきたい。『番族慣行調査報告書』では、そうした首長制に関する諸特徴が多面的にわたって詳しく報告されている。最初に首長の権限について、以下のように整理してみよう〔臨時台湾旧慣調査会 1921：17-8〕。

- 1 祭祀、狩猟、戦闘などに際して、配下の平民を使役させる権限を持つこと。
- 2 配下の平民が住居を変更したり、首狩りの遠征に出かけることを許可する権限を持つこと。
- 3 平民間の紛争を調停し、また慣習を破る行為があれば懲戒処分を行なう権限を持つこと。
- 4 「地租」などを徴収する権限を持つこと。

このような権限を背景に首長はさまざまな特権を享受する。同書から、関連部分を次のように抽出しておきたい〔臨時台湾旧慣調査会 1921：20-25〕。

- 1 平民からは礼儀上、敬われ、上席に座るなど、作法に関して権威づけが与えられること。
- 2 人体あるいは「百歩蛇」（毒蛇の一種）の形象を首長たる者の紋章とするのが許されること。
- 3 衣類に刺繍をしたり、身体に刺青を施したりする権利を持つこと。
- 4 特定の氏名を名乗る権利を持つこと。

こうして首長は、社会生活の中核的な存在として、平民に対して優越した立場に立っていた。その行使する権限からして、法的、儀礼的、そして経済的にも、第一人者としての格付けははっきりとしている。経済的な権限について補足していえば、先に挙げた「地租」などの徴収権は首長の特権である。再び、『番族慣行調査報告書』を引用してみよう。同書には、多岐にわたる「地租」などの詳細が列挙されている〔臨時台湾旧慣調査会 1921：328-34〕。ただしその記述をみると報告者の翻案が著しく混入しているので、ここでは同書の記載方式自体からはずれ、パイワン族の一地方の民俗語彙に注意を払いつつ、首長が徴収する物品の詳細を次のように整理し直してみたい。

1 「ツァジャ」あるいは「カジル」

米、粟、芋などの収穫物の一部は首長に上納するが、その上納品をいう。平地居住の漢人が自己の領域を流れる河川の水を利用するとき、織物、鉄器、貨幣、その他の物品を納入させることがある。その上納品をいう。

2 バデス

狩猟の獲物の一部や漁獲物の一部、そして飼養している豚を殺したときのその一部は首長に上納する。その上納品をいう。

また、木材、石材、竹、茅などを採取したとき、その一部を領域内の首長に上納する

が、その上納品をいう。

3 シニバラジ

ある者が他人の領域を通過するときに支払う物品。通行に要する代価物である。

4 パア

平地居住の漢人との間に交易関係があるとき、彼らに対して定期的に織物、鉄器、貨幣、その他の物品を徴収することがある。それを称していう。

こうしてみると、首長は定期的に農産物の一部を徴収し、不定期的には狩猟や漁労などを含め、収穫物および捕獲物の一部を徴収する権限を持っていることになる。ただし、徴収するといっても、首長の権限でなされるその行為は、村人自身からみると「贈与」と意識されていたようである。この当たりの事情は、比較的最近に調査を試みた松沢の報告が指摘している [松沢員子 1979 : 19]。すなわち、

「カジロ」「パディス」を含めて首長家に贈るものを、村人たちは首長への「シニパバイ」(贈物)と云っている。

貢租を「贈り物」と捉える観点は、重要な意義を示唆していよう。剰余生産物が生じても、それは決して首長によって収奪されるものではなく、「搾取」という概念自体が存在していないことを示しているからである。それだからこそ、村人の行為はまさに「奉納」というにふさわしい。

他方、首長の下に集積されたそれら物品は、その一部が首長個人の私的消費に割り当てられたほか、首長の補佐役や村の司祭者などにも分配されたし、粟儀礼などの村落祭祀で大量に消費されもした。とりわけ、頻繁に行なわれる村落祭祀は、首長の下に集められた粟や肉の大量消費で特色づけられ、村人一同の共食が数日間続くのも珍しくはなかった。たとえば、次にみる農耕儀礼の場面での共同消費は圧巻であったと、松沢の報告から推断することができよう [松沢員子 1979 : 39]。

粟收穫祭の前に山と積まれた粟は祭りの後には低くなってしまふ。

この大量消費の場面は、何やらマリノフスキーの報告したトロブリアンド島民の事例を思わせる。簡単にいえば、そこでの首長は、「食物や貴重品の形でいつもゆたかな富の供給を受け、彼の高い地位を維持するためにその富を消費する」[Malinowski, B. 1922 (訳 1967 : 133)]。実際、首長は相当量の收穫物を貯蔵していて、「あらゆる共同体の事業にともなう余分の支出をまかなうのに十分な蓄積がつねにある」[Malinowski, B. 1922 (訳 1967 : 179)]。

首長制の存在根拠を富の集積とその分配方式の中に求めるなら、パイワン族のこの制度はまさにその典型である。こうしてみると、結局のところ、首長へ奉納した收穫物も、その内のかなりの分は村人に還元しなければならないわけだから、首長といえども村人の総意に基づいた存在といえる。逆にいえば、この村人の総意を失うと、首長はその地位を全うすることができなくなる。

首長が乱暴狼藉を働き、貪欲を貪ったため村人から排斥された例が、『番族慣習調査報告書』には詳しく列挙されている。その中でもパイワン族クワルス村の例は、首長の地位を維持するには村人の総意が必要だとする、台湾首長制のあり方をよく表している。ひとまず、それを要約してみよう〔臨時台湾旧慣調査会 1921 : 20〕。

大正六年のこと、この村の首長が收穫物の貢租を増額した。そのため人々は憤り、元の状態に引き戻すよう要求し、紛争が生じた。村人は移住を決意したため、警察が調停に乗り出し、村人の懇願を入れるよう首長を説得し、こうして解決をみた。

さしずめ『春秋左氏伝』にみる表現を使えば、その首長は「衆怒難犯、専欲難成」(衆の怒は犯し難し、欲を専らにするは成り難し)と、呟いたかもしれない。首長はたしかに地位的には高位にあり、そのことだけでも平民から尊敬を受ける立場にある。だが、その行動は村人の総意を絶えず反映していかなけれ

ばならない。総意こそが政治の基本だから、首長といえども一方的な権限の行使は抑制されねばならない。その総意を踏み躪ることは、地位の喪失をもたらす。この意味では、まさしく、「専欲無成、犯衆興禍」（欲を専らにするは成ること無し。衆を犯さば禍を興さん）という『春秋左氏伝』（襄公十年）の世界と変わることはない。

最後になったが、台湾の首長制を身分的序列関係の観点から捉えるとき、若干の注釈が必要である。首長に対する呼称として、前記『番族慣行調査報告書』は次の民俗語彙を紹介している。すなわち、「マザザギジャヌ」、「タリアアラライ」あるいは「テナナライ」などであって、それらは「蜜蜂の女王」を意味することばだという〔臨時台湾旧慣調査会 1921：15〕。パイワン族の調査をした末成は、より詳しく階層構成を記している。すなわち、〔末成道男 1973：63〕、

これまで、パイワン族が頭目と平民の二階層に分かれているものとして述べてきた。しかし、実際には頭目のうちにも格の高低があり、——。M村でも、現在中間の層が存在し、頭目 mamazangilan と平民 kaktitan の間に、taloborongan、pualo の二層がある。

ただし末成は、パイワン族の身分階層制は、明確な境界をもち、共通の権利・義務を持つ階層から成り立っている制度ではないという。たとえば、首長家の遠縁と結婚した平民の子どもは、多少なりとも首長家との関連をもっているからである。こうして彼は、「無役の平民から大頭目家の直系子孫に至る連続的な格付けの体系」としてパイワン族の首長制を把握することになる〔末成道男 1973：65-6〕。この見解は、筆者の事例に照らしてみても、正しい。そして、まさに連続的であるがゆえに、地位の上昇を求め、少しでも自己の評価を高めようとして、村人は互いに競いあう事態が生じる。時としてその競争は、体面を気にしたはったりじみた様相を呈してくる。何よりも顕著な傾向は、事あるごとに世間体を気にする風潮を生み出していくことである。ここにこそ、ルカイ族の特色が潜んでいるというべきであろう。この事実は後述しよう。

3 首長制の形態

(1) 首長家と神話の世界

本稿は、筆者の調査地、台湾屏東県茂林郷多納村の記述である²⁾。その村は、現地名ではコガダヴェン Kongadavan 村、日本時代では通称、トナ村と呼ばれていた。近隣には他に二つの村があるのだが、合わせてこの三つの村は、日本統治下に至るまで、それぞれが一つの独立した政治体制を布いていたことで特異な村落であった。それぞれの村にはタリアライ talialalai と呼ばれる首長が独自に存在していて、社会生活はこの首長を中心として営まれていく。しかもそのタリアライは、自己の村のみを統治するのであり、こうしてみると、一村で完結した政治領域を形成していたことになる。

この地で言うタリアライのことを首長と訳しておいたが、実はこの語は多義的な使われ方をするので、注意が必要である。この村のタリアライはどこかと特定して質問したとき、人々はこの村を最初に開拓した家を指す。本稿では、その首長を特に区別して呼ぶ際、「大首長」と表現しておく。だが、他にも自称、他称ともにタリアライと呼ばれる人たちがいる。それは、この村にはさまざまな来歴を持つ、いくつかの系統が混在していて、この後来系統の本家筋も首長家とみなされているからである。便宜的に彼らが大首長と区別して、「中首長」と称しておきたい。さらにまた、実に多くの人々が時に応じて自己を首長と呼んでいる。彼らは大首長と何らかの形で親族関係の辿れる人たちであり、その中には大首長の直接分家も含まれる。彼らが自己を称して首長と呼ぶ背景には、この村独自の上昇志向意識を考えねばならないが、これについては後述しよう。いずれにしても、こうしてたくさんの首長が併存しているのである。

さしあたっては、首長の権威の源泉がどこにあるのか考察するために、「大首

2) 野外調査は、1984年3月、同年7—8月、1985年8—9月、および1987年12月に行なった。そのうちの最近の二回は、文部省科研費（海外学術調査：課題番号61041083、63041121）による調査である。

長」と「中首長」を取り上げておくことにする。彼らが持ち伝えてきた神話伝承、そして開拓の経緯をとりわけ問題にしよう。その作業をするにあたって、『番族慣行調査報告書』（五巻ノ一）をひもとき、首長家の名称と口碑伝承を調べてみよう。その書物には村建てについての伝承が説かれている。以下に、要約してみる〔臨時台湾旧慣調査会 1920：49〕。

この村にはラルグワヌとタリヤバとの二つの系統がある。ラルグワヌはもとバツガに居たが、その後数箇所を点々として、この村に来了。タリヤバは、もとアラビサヌという土地にある池の底から生まれ出た男女が結婚してきた子孫で、その後やはり移住を繰り返しながらこの村に来了。

その後の報告、たとえば『台湾高砂族系統所属の研究』にもこの村の首長家の来歴が語られている。参考までにその名称を挙げてみる〔台北帝大土俗・人種学研究室 1935：258〕。なお、引用文中の「社」とは、この場合「村」をさしている。

当社には五つの頭目家があり、夫々の名称及び配下の戸数は次の如くである。（昭和七年五月末）

Θangiradan	26戸
Laluguan	34戸
Tailavan	17戸
Tamaoror	22戸
La-putoan	20戸

この記述から、容易にこの村の構成が複雑であり、複数の首長家が存在するところから、いくつかの異なる系統の混合した村落だということがわかる。そして、これら首長家は社会生活の基本に関わる神話や自己の出自を語る伝承

を伝えてきた³⁾。ここではそうした首長家に連なる神話のいくつかを問題にする。ただし上述した首長家の記述には、明らかな不備が認められる。まず第一に「配下の戸数」とは何を指すのか不明である。首長家の列挙の仕方・その順番には何の説明も施されていない。首長家同士の格付けも不確かな記述に基づいている。そうした点を補正しながら、以下、筆者による聞き書きの資料を整理したい。最初に、村人自身からタリアラライと認定されている首長家、とりわけ「大首長」と「中首長」のうちの主要な家とを順に列挙してみよう。

- 1 サギラダン Øangiladan
- 2 ラルグアン Laluguan
- 3 タマオロル Tamaoror
- 4 ラピトアン Lapitoan
- 5 タイラバン Tailavan

3) 『台湾高砂族系統所属の研究』には、当時存在していた首長家の名称とその始祖伝説が採録されている。参考にしてみたい〔台北帝大土俗・人種学研究室 1935：258〕。

Øangiradan：当社の西北、濁口溪の北、Apilan と云う地で地中から男女二人が生まれた。この二人が結婚し、その間に沢山の子供が生まれたが、女兒一人のみ育つ。これが太陽と関係し、太陽から首飾りをもらった。そして男女の双生児を生み、女兒のみ育った。これが当家の祖先というが、それから何代になるか分らない。Apilan では、家号を Paatsungan と云った。その後東北の Tarunguran に移り、次に当社に来了た。

Laluguan：Øangiradan の家からの分れで、当社にきてから何かの理由で頭目家になった。

Tailavan：トナ社当方の Atsavan から Lamulamur に来り、次いで当社に移ったことが知られているのみである。

Tamaoror：Øangiradan 家が Tarunguran に移った時、既にこの頭目家がそこに居住していたと云うのみで、その起源は伝えられていない。次に Lamulamur に来り、更に当社に移った。

La-pitoan：マガ社の南、Takerarovan から Lamulamur に移り、次に当社に来了たと伝えられているのみである。

これら神話伝説のいくつか、たとえば、太陽との間に子が誕生した話、地中から人が誕生した話、などは南台湾でありふれた伝説である。だが、全体として、すでに当時から伝承の濃度は希薄のようであった。

これらのなかで、サギラダン家がもっとも格の高い家とみなされている。その理由は、この家が村建てに関係しているからである。その事実に基づいた神話は豊かに語り継がれており、その伝承を背景に大首長としての権威が正当づけられている。そこで、サギラダン家から順次、その伝承の世界に分け入っていく。

① サギラダン家

先の筆者による概念に従えば、これは「大首長」である。そしてこの村の開拓宗家であり、この家の長男が、いわば万世一系的に、代々、大首長を継承してきた。それゆえ、家の格付けも最高位であり、かつ他の村人を寄せつけぬ不動の地位を永年保ってきた。そうした圧等的な優位性を語る伝承は豊かである。最初に村建て神話をみておきたい。

サギラダン家の祖先は、昔、パーツガンにいた。ある時、この首長の配下の平民ラルダスが今の村のあたりまで狩猟にきた。ここはサギラダン家の猟場だった。付近一帯は萱っ原で、鹿も猪も豊富であった。狩りを終えて帰ろうとすると、犬は水溜まりにいたままで、云うことをきかなかった。そのため犬を残して帰った。その後、その平民は首長に、「犬は帰らなかった。それにコガダヴァンは、土地は平らで、敵の攻撃からも守れるし、泉もあってよい土地みたいだ」と報告した。そこで首長がここに来て、竹の杖を地面に突き刺したところ、そこから竹が出てきた。首長は納得して、犬のいた水場の近くに家を建てて住むことにした。この後に、各地から人家の煙をみて人々が集まってきた。

サギラダン家がこの村でもっとも権威ある大首長を名乗っているのは、その家が最初にこの村を開拓したという由来に基づいている。仔細にみればこの村を「発見」したのは平民だが、移住を決断したのがこの大首長家であって、多くの人たちはこの大首長家の神話を受け入れている。しかもこの伝承は単なる語り物の世界に留まらないで、毎年行なわれる儀礼の世界にも登場している。

そこにこの伝説の重さを読み取ることができる。その儀礼行為は、人々がキリスト教に改宗する前、伝統行事が支配的であった頃の、米の収穫儀礼での一駒をなしていた。

毎年、米の収穫時、各家庭では一年の終りを祝い、かつ幸運や豊作、豊猟を祈って、その竹林に生えている竹の葉を神に供えた。笹の中に、肉の入った餅とともに、この竹の葉を添えて、神に捧げたのである。そのため、この時期になると全村のすべての家庭がこの竹の葉を取りに行った。

この儀礼を通して、開拓宗家の優位性が村人の脳裏に刻み込まれていく。一年の感謝の印をこのような儀礼行為で締め括ることによって、開拓宗家の権威は揺らぎないものになっていったであろう。村人自身も、毎年繰り返してこの儀礼を行なうことによって、開拓宗家のなした偉業の尊さを偲んだに違いない。この宗家が村人の精神的支柱として確固とした地位を保ち、村人を圧倒し続けてきたのも、この儀礼によるところが大きい。

開拓宗家は絶大な権威を手中に納めている。村人が収穫した作物の一部を徴収する権利を持つこと、村落政治の中心に立つこと、その他先に例示した首長としての特権をもつこと、これらの諸点で卓越した存在でありうるのは、最初にこの村を創建したという歴史的事実によっている。この開拓宗家の特権的位置は、さらに宗教的な権威によって不動なものとされている。その権威は、次のような神話をこの家が伝承してきたことで正当化されている。

昔、サギラダン家にバンテルとモモニという夫婦がいた。ある日、タヌバクという名の子どもを連れて畑に出かけた。子どもを畑の側の小屋に寝かせておいたところ、その子が泣かなくなったので、不思議に思い、見に行った。そうしたら子どもの姿が見えず、その代わりに玉石が置いてあった。その晩、モモニは夢をみた。「タヌバクは連れて行ったので心配はない。五日後に返す」という神のお告げであった。五日後に、タクルパンと名乗ってその子は帰ってきた。すでに二十歳ぐらいの立派な青年に育ち、鈴を付け、刺繍も施したきれいな服装をしていた。そして七名の神

を帯同して来た。だが村人はこの神を見ることができない。神の腰掛けが七つあって、その席でそれぞれの神が唾を吐いていたので七名いると、その数だけはわかった。タクルパンは五日目に帰って、それきり戻って来なかった。その時、神は祭祀用の道具（小刀、弓矢、鉦）と共に、赤色と黒色の粟、それに陸稲の、それぞれの種を与えた。

粟は彼らにとってもっとも大切な作物である。日常の食料である他に、祭祀の時にはなくてはならない作物である。そのために、粟の栽培に際し、さまざまな禁忌がみられ、人々は厳しくその行動を規制されていた。かつては、粟の収穫祭は盛大に催されていた。こうした粟の栽培は、実は開拓宗家と深く関わっていたのである。

祭祀のとき使われる小刀、弓矢、鉦は、旧慣が支配していて人々が呪術的な世界に生きていた頃、大切な道具であった。小刀は病氣治療などの機会に使われる。そのさい巫者は屋根に登り、神懸かりの状態に陥るが、必ず小刀は携帯しなければならない。鉄には呪術的力が込められているからである。弓矢は豪雨のときに効験があると信じられていた。まず鉦を鳴らし、次いで矢の先を火で焼いて窓から天に向かって射ると、天候は回復すると信じられていた。旱魃に際しても同様な試みがなされたが、それでも効果がないときは谷川で木を水に浸け、鉦を鳴らして祈願すれば、雨がもたらされると考えられていた。このようにして、小刀、弓矢、鉦は祭具として重要である。そしてそれらは、いずれも神から下賜されたものである。

この開拓宗家の優位性はこのような神話伝承に根ざしている。もっとも、サギラダン家は、その後、分家筋にあたるオバラト家に命じ、粟に関する祭祀の責任を委譲した。こうして、その祭祀道具もオバラト家が管理するようになる。この家は、以後、収穫祭に際しても、豚を殺し、儀礼の中心的役割を負うようになり、「祭祀家（カダアナヌ kadaananu）」としての重責を受け持つようになる⁴⁾。しかしその祭司家といえども、開拓宗家の出自を引く家に他ならない。

4) これについては、山路勝彦1990参照のこと。

この開拓宗家にまつわる神話伝承はこれだけではない。次の伝承は先の話の続きとして語られている。

パンテルの息子が連れてきた神は、村人と一緒に仕事をした。木を切り倒したり、畑を耕したりする神の動作は早く、人々は傍らで見守っているだけだった。収穫した粟は、神と村人で折半した。村への運搬は神が教えてくれた。奇しきことに、途中で川を渡ったが、粟は濡れなかった。その神の家は深い水溜まりの底にあった。

ある日、パンテルは村人と一緒に川に魚取りに行った。網を頭に巻いて水のなかに入ってしまったが、なかなか浮かなくてこなかった。村人は死んだと思ったが、実は神の家にはいた。彼が死んだと思っているうちに、サギラダン家の人は夢を見た。「黒爪で白い足の豚を供えよ」というお告げだった。黒豚や白豚を水の中に投げたが、すぐに浮かんできて失敗した。お告げどおりの豚を水のなかに入れたら、パンテルが浮かんできた。水に入って三日目のことであった。しかし彼は水には濡れてはいなかった。

さまざまな儀礼の場面で豚の供儀は不可欠である。おおよそ神を慰め、かつ神に諸々の祈願をする際、豚の供儀なしには何事も始まらない。この意味で、豚は霊界とこの世を結ぶ媒介者として位置づけることができる。その豚の供儀の始まりは、やはり開拓宗家と結びついていたわけで、この伝説は宗教的な格式の高さを権威づけている。日常生活でもっとも重要な粟、さまざまな困難に打ち勝つための祭祀道具、そして霊界との媒介を務め儀礼生活に不可欠な豚、これら人間生活の根本に関わる品々は、開拓宗家に集中している。いかにこの家が重要な存在であるか、これで理解できたことと思う。

② ラルグアン家

この家はサギラダン家とともに村一番の大首長家であり、両者は同格の家柄である。この両家は元来、出自は同じであり、サギラダンを建立した先祖を共に戴いている。ところが、何代か前に、サギラダン家の長男が分家し、新たにラルグアン家を創設した。二つの首長家の並立は、このような事情によってい

る。この経過を以下に示しておきたい。

昔、サギラダン家の長男が屏東県のパイワン族の娘と結婚することになった。しかし娘は、この村の家は石垣で作られ、内部は暗く手芸もできないし、禁忌も多くて面倒だと苦情を言い、改造を要求した。この要求を受け入れ、その長男は家を新築し、移り住んだ。それまで居たサギラダン家は弟に譲り渡した。移転したとはいえ、この家は長男筋にあたり、長男が父を相続するという慣習に従って、今までどおり首長としての権利を引き継いだ。ただしサギラダン家は、次男筋になったとはいえ、家筋の連続性という観点からすれば、開拓先祖から連綿と続いているゆえに首長としての権利はなお持ち続けている。これがために、二つの最高格式の首長家の併存という現象が生じたのである。

ルカイ族の相続慣行については、すでに述べたことがある[山路勝彦 1990]。そのときに、ルカイ族では長男相続が原則であること、それと共に家屋敷の連続性が求められていること、こうした点に特徴があることを指摘しておいた。この首長家で起った現象は、長男分家が原因して家屋敷の連続性とは整合されなかった例である。このため、首長家の継承に関しては折衷的にならざるをえなかった。これが、二つの首長家を併存させた理由である。こうして人々は、「家はサギラダンが大きく、人はラルグアンが大きい」と表現し、この状況を説明する。この事情により、収穫物などの奉納は先にラルグアン家に納められるのだが、その後、両家で折半される。

首長家はまた象徴的にも村人より卓越していなければならない。それゆえに、この家の屋内の柱には、首長家としての重要な権威を表す彫刻が刻まれている。先祖を象った人物像がそれである。首長家だけがこの彫刻を施す特権を持っていて、その特権は最大の名誉の証とされている。とはいえ、そして首長としての実質的権限は長男筋に割り当てられているといえども、サギラダン家は宗教的に価値づけられた家であり、象徴的な存在意義を今なお失なっていない。

③ タマオロル家

これは後来の首長家である。東方から来たといわれ、また、東から小さな鳥が石の柱をくわえて持ってきたという伝承を持っているが、出自自体は詳しく伝わっていない。ただしこの家は、サトイモの起源伝承を伝えている。

この家の庭に穴があり、地底に通じていた。その地底から女がサトイモの種を持ってきた。その女は後に妊娠し、そしてまた地底から上がってきた。上がってくる間、息をしていけないという禁忌があったが、その女は地上に着く直前に息をしたため、穴が塞がり、とうとう地表に出れなくなった。

この家は大首長家に次いで第二番目の由緒ある家系を誇り、大首長との婚姻も代々、繰り返して結んできた。粟や豚など祭祀に直接関係する伝承は持たないが、日常生活で重要な食糧でもある里芋の起源伝承を持っていて、そのことが独自の地位を保つ根拠となっている。

④ ラビトアン家

この家も後来の首長家である。旧慣時代は、首狩りのときの儀礼を実習する司祭家であった。そのため、この家にはさまざまなタブーがついてまわり、大首長以下、村人はむやみにこの家の中に入ること、そして食事を供されることを忌避していた。この家に伝わる伝承は次のようだが、首狩りの司祭家になった理由は、人々の意識のなかでははっきりしていない。

移住前は、平地村落に近いところに住んでいた。ある時、村中で踊りをしていて、全員が手をつないだまま崖から落ちてしまった。しかし一人の妊婦のみが、踊りに参加しなかったので助かり、そしてこの村にやって来た。大首長は居住を了承するとともに、その女の子孫に首狩りに関わる祭祀を司らせることにした。

この伝承について村人は象徴主義的な解釈を施してはいないが、そこに死と再生というモチーフを読み取るのは、難しいことではない。崖からの墜落死、

生き残った女から子孫が繁栄したこと、こうした出来事の時間的経過にみる死と再生のモチーフは、他方で首狩りのもつ意義、すなわち、敵の死で自己の繁栄をもたらす呪術的意味と符合する。さすれば、呪術的な恐ろしさを秘めた家とみなされていた理由もうなづけよう。

⑤ タイラバン家

後来の移住家である。しかしながらその系統の直接的出自を引く子孫は絶えていて、現在の住民は、その後、その屋敷地に分戸した別系統の子孫で、その関係で屋敷地の名跡としてのタイラバンを名乗っている家である⁵⁾。こうしたためか、開発・移住に関しての詳しい伝承を欠いている。

以上に記した家がこの村で公認されている代表的な首長家である。しかし実は他にも、弱小ながらも、何戸かの後来の首長家がある。その中には平民との結婚を繰り返したため没落してしまい、今や何の権威も持たなくなった家もある。こうした単なる過去の名目しか残っていない家の記述は、冗長になるので省略する。さて、こうした首長家を中心として、身分秩序がいかに維持されていたのか、次にみることにしよう。

(2) 首長と平民

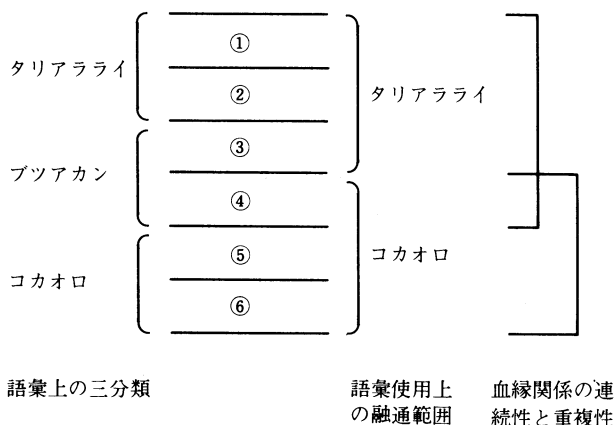
この村の身分秩序を記してみよう。まず民俗語彙から知れるところでは、首長と平民との二区分が基本である。平民とはコカオル *kokaolu* の訳語として使っているが、この階層は、収穫物の一部を大首長に貢納する義務を持っている人たちを中心として構成される。しかしながら実際には、すべての村人は、この二つの階層のいずれかに整然とかつ明確に帰属している、と主張しているのではない。この両者の間には、どっちつかずの人たち、もしくは両者に関係していて、いささか曖昧模糊とした立場の人たちがいる。この階層には、首長家との系譜関係を基に自己をタリアライと称している人たち、それに、平民

5) これについては、山路勝彦1990参照のこと。

でありながらも縁組関係を通して首長との関係性を主張する人たちが含まれている。多様な存在である彼らを村人はブツアカン butsuakan (「中間」の意味)と呼んでいるので、ここでは直訳的に「中間」階層という訳語を当てておきたい。かくして語彙範疇から、三つの身分秩序が存在することになる。すなわち、

- 1 タリアアラライ
- 2 ブツアカン
- 3 コカオロ

とはいっても、現実にはこうした身分秩序に従って村人は人々を整然と分類しているわけではない。まず第一に、個々の家はそれぞれ微妙に格付けが違っていると考えられている。しかもその格付けは、各人の主観的判断がかなり混じり込み、どの階層のどの位置に格付けされるかについては、きわどいところで人々の判断がまちまちとなる。以下、個々の身分について説明を試みるが、それはあくまでも大雑把な目安にすぎない。



第一図 身分秩序の模式図

- | | |
|----------------|----------------|
| ①タリアアラライ (大首長) | ②タリアアラライ (中首長) |
| ③ブツアカン・タリアアラライ | ④ブツアカン・コカオロ |
| ⑤コカオロ | ⑥コカオロ (ワシ・ワブ) |

1) タリアライ

この範疇には、先に挙げた大首長、この大首長からの直接的分家、そして後来の首長、つまり中首長が含まれる。

大首長は、先に紹介したサギラダン及びラルグアン両家を指し、この村の根幹をなす存在として、身分制の頂点に位置している。他の人たちが、後述するように、縁組関係によって家格が上下するのに対して、この大首長家だけは不動の地位を保持し、すべてに超越している。しかも、大首長は村人から収穫物などの一部を徴収する特権も持っていた。

大首長の地位は不動であり、その優越した地位は縁組関係にも現われている。ルカイ族、パイワン族などの首長制を作り上げてきた社会では、縁組に際して家格の釣り合いが求められる。首長家の場合は、それ相当の家と配偶関係を結ぶが、村内に相手が乏しいと、村外、それもかなり遠いところから、配偶者を求めるのがふつうである。それだからルカイ族の系譜伝承を遡って検討していくと、三千メートルを越える中央山脈を横切って東西の遠く離れた地域間で婚姻関係が結ばれていたのを知り得る [馬淵東一 1954 (1974: 348-59)]。網の目のように張りめぐらされた首長家同士の婚姻関係は、社会圏の拡大をもたらすのに大いに効果的であっただろう。首長家の系譜伝承は、過去のこうした由緒ある婚姻の事実を語り伝えてきたわけで、首長家の系譜とはとりもおさず「通婚の記録装置」でもあった [笠原政治 1998: 83]。

大首長の直接の分家もタリアライを名乗ることが許される。ただし大首長に対して貢納の義務を持つ点で、大首長とは区別される。彼らの身分上の地位は、何世代にもわたって安定し続けることは難しい。なぜならば、平民階層出身の女と結婚すれば地位は低下し、そうした下位者との結婚を何代か続けると、しまいには自己も平民化してしまうからである。そのために、自己の家格を維持し、あるいは高めるため、縁組に際しては家格の釣り合いを求めて神経を研ぎ澄しておかねばならない。地位の上昇をもくろむ者にとって、縁組は常に戦略的道具である。

後来の首長、つまり中首長もタリアライである。彼らはこの村へ配下の平

民と移住したと伝えるが、その平民はすべて大首長の配下に編入され、中首長は、粟、米などの徴収権を失ってしまった。しかしながら、大首長に対する農作物の貢納は免除されていた。こうしてみると、大首長からの経済的自立性ある程度持っていたし、この基盤に立って首長としての格の高さを維持していたといえよう。加えて、彼らがかつて居た土地はかなりの遠隔地だが、その私有権は保持し続けてきた。村人はよく、そうした土地で狩猟に励む。中首長も、そこで捕獲した獲物の肉の一部を大首長に貢納する義務があったとはいえ、他の村人がその土地で狩猟をした場合、肉の一部を所有者である中首長は請求する権利を持っていた。中首長はこうして、狩猟に関しての経済的特権も持っていて、自己の存在を強調することができたのである。

2) ブツアカン

すでに述べておいたように、ブツアカンは「中間」を意味することばである。「中間」の概念には、両極からは独立した範疇である反面、両極の範疇にも関係しているという曖昧さがある。したがってその具体相は複雑である。そこで、村人の見解にそって、次のように分類し記述しよう。

1 ブツアカン・タリアラライ

2 ブツアカン・ココオル

① ブツアカン・タリアラライ

大雑把に言ってこの範疇に属するのは、大首長の孫分家、そして後来の首長の分家である。したがってタリアラライとは系譜関係が連続しているのだが、そこからの関係が遠くなったということで、「格」が一段下とみなされる。もはや純粹のタリアラライとは言えず、かといって純粹のココオルでもない中間的な身分にあたる。

ここで言う「格」とは、現地でのカウツァワヌ kautsawanu の翻訳である。この民俗語彙は日常生活でもっとも大切なことばの一つであり、通例、会話の文脈では「人格（人の格）が高い、あるいは低い」と表現するときに使われる。

さらに補足すると、この「人格の高い人」とは、次のような種類の人たちを指している。

- 1 大首長に対して使われる。このばあい、最高の格付けを表わす尊称語としての意味を持つ。
- 2 学校の先生、出世した人、そして演説の上手な人、狩猟に長けている人、紛争を調停するほどの政治的能力を持っている人、こうした優れた能力を持っていて、周囲から高い評価を得ている人に対して尊称語として用いられる。
したがって、若者が成長して狩猟の技術に長けてくると、その者は taumomo na kautsawanu（大きくなる・の・人格）と表現される。

したがって、このことばは肉体的にも、精神的にも、つまり全体的人間性に関わり、かつその格調高さに関係することばである。そこで、ここでは「人格（人の格）」と訳しておく。けだしこのことばが重要な意味を持つのは、社会的地位との関係で語られるからで、高い位階ほど人格は高くなると考えられている。そしてさらに、そのことばが次の用法で使われているのに注目される。

- 1 モアガル・カウツァワヌ moagalu kautsawanu（上がる・人格）
- 2 モアルブ・カウツァワヌ moalubu kautsawanu（下がる・人格）

この用法の含意するところは、この社会の首長制の本質を理解するうえで大切である。社会的位階が高いことがとりもなおさず人の格が高いと考える社会にあって、縁組が果たす役割は重要である。「中間」層が格上の首長家の娘と縁組をすれば、生まれてくる子どもの地位は上昇し、平民の娘と縁組すれば下降するというのが、ここでの規則である。そうしてみると、縁組が家格を左右するというこの現実、人々が具体的にはいわばシーソーゲームの世界に身を置いていることを意味する。現状より上昇すれば、人々は人格が上がったといって喜ぶし、下がれば落胆する。縁組とは人生ゲームであり、野心のある人々は

より高い人格を求めてさまざまな戦略を練ろうとする。

反対に、中首長でさえも、平民との縁組が繰り返されると地位は転落してしまう。彼らにとってこれは憂うべきことである。一度転落しても再び高位の首長と縁組すれば、地位は回復するのだが、高位者との結婚には財産が必要であり、その用意が常に備わっているとは限らない。彼らの周辺にはいつも良い条件が横たわっているわけではないので、彼らの地位は不安定である。

② ブツアカン・ココオル

平民階層出身の男がタリアラライに属す娘と縁組したとき、その生まれてくる子どもは純然たる平民ではなく、「中間層」だと目されている。この種の階層違いの結婚に際しては、平民の男は通常の聘財に加え、後述するようにサポタイアガル sapotai-agalu と称する特別財を支払わねばならない。それはトンボ玉、壺、その他の高価な物品である。聘財自体は縁組相手の家の財産になるが、その特別財は縁組当事者を通して大首長に贈り届けられる。もしこの特別財が支払われないと、その縁組は正当視されず、したがって生まれてくる子どもはいぜんとして平民のままであり、「中間」層として認められない。

平民の男と首長階層出身の女との間にできた子どもは、正規の婚姻手続きを踏むかぎり、その母を通して首長との間に親族関係が生じる。だが一方、その子どもは「ココオルの系統をひいている人間」に違いない。かくしてその子どもは、首長と平民との双方に関係を持つ曖昧な位置におかれるのである。

3) コカオル

ココオルとは、身分階層からみれば平民を指し、村落内では最大の人口を占めている。生活基盤としての土地の所有権を他の村人とともに共同所有しており、この意味では自由民と解して差し支えない。村落内の主な土地自体は、村落成員の総有に帰していたが、この問題は後に展開しよう。

この平民層も、実を言えば二種類に分類される。すなわち、

1 コカオル

2 パシ・ワプ

この二番目のパシ・ワプ（pasi-wapu）は「雇い人」のことであって、大首長のみが彼らを雇い入れることが許されていた。彼らは、大首長の日常の世話、たとえば炊事、洗濯、薪取り、水汲み、酒作りなどの仕事を務めとしていた。だからといって大首長に隷属していたわけではなく、他のココオルとともに平等な村落成員権を持っていたのだから、平民階層に属すといえよう。

さて、以上までがコガダヴァン村の身分構成の叙述である。すでに明らかにされたように、首長を中心に身分秩序は展開していた。しかも人々は何らかの関係を首長との間に維持しようとし、縁組を利用してできるだけ上昇気流に乗ろうとしているのが、実状である。とりわけ、首長との関係が密接になればなるほど、自己の格付けは上がることになる。このような気風に影響されて、人々は自己の存在をできるかぎり誇示しようとして努力を惜しまない。こうして、面子を大事にする他人との競争が展開していく。

階層社会の特長は、他者との差異性を常に強調することにある。首長層と平民層との間には、政治的・経済的な関係以外にも、たとえば生活形態の上でさまざまな異質性が認められる。なかでも、服飾は人々の視覚に直接的に差異性を訴える力を持っている。伝統的服装、とりわけ祝祭に際して着用される服装は、身分秩序を表現するのにもっともふさわしい道具である。すでにみたように、首長は百歩蛇の形象を紋章として使用する特権を持っていた。それによって、首長およびその系統の者は、百歩蛇の形象を服装に刺繍する権利が与えられていた。こうしてみると、平民層と首長層との間には明確な区別がなされていたといえる。

しかしながら、身分上の差異は現実には流動的である。その理由は、平民層は中間層を通じて首長層と接続していて、婚姻を通して人々は上下に移動することが可能だからである。こうした身分移動の経路をいかに利用して上昇気流に乗るか、これが利発な村人がたてる人生設計でもある。

4 土地所有と貢納制

現在の生業は水田稲作が中心で、次いで陸稲、芋、果実、野菜類の栽培が行

なわれている。このうち稲作は日本統治の結果として大正末頃に栽培されたもので、伝統的な生業といえば、粟の栽培にあった。

粟は焼畑で栽培される。その一連の過程は、山の傾斜地を利用し、森林を伐採し、燃やし、そして整地して畑を作るという作業から成り立っていた。その活動がすべて土地から切り離されない以上、生業形態は土地所有のあり方と密接な関連をもっている。彼らはまた狩猟に興じる民でもあった。狩猟は広大な猟場を必要とする。実際にはかなり山奥の、数日かけても歩き廻られないような広大な領域が猟場となる。こうして、人々が暮らしていくには、かなりの面積の土地を必要としていた。

現在のコガダヴァン村の住民が利用できる土地は、隣村との境界線の内側である。その境界線は稜線や溪谷などの自然的障害によって設定されている。そしてこの範囲内ならば、ほとんど自由に村人は活用できたのである。

さて、以上を背景として土地所有と貢納制度について考えてみたい。

(1) 所有の概念

ルカイ語のヤカイ yakai なる民俗語彙は多義的な意味をもっている。ディダアナ didaanu なる民俗語彙は「土地一般」を指し、また次の例文にみる接尾辞のギリ gili は「私の」という意味をもつことを承知して、次の文例を検討してみよう。

- 1 yakai na didaanu
- 2 yakai na didaangili

この文は、それぞれ以下のように翻訳される。

- 1 土地がある。
- 2 私は土地を持っている。

詳しく述べるまでもなく、前者は「存在」、後者は「所有」に相当する語彙である。これとほぼ同じ多義的用法は、タイヤル族にもみえる〔山路勝彦 1986：64〕。しかしながらここで問題になるのは、所有ということばを使うとき、それはどのような意味を含意していて、その所有主体は誰か、明確にすることである。まず所有なる概念は処分権と背中合わせの概念である。ところで、日本時代に造成され個人所有が認められていた水田を除いて、他の畑、山林などの土地を処分する権限を誰が持つか考えると、若干の土地を除いて、おおむね村落成員の手元にあるのがわかる。村落成員であることが、土地の管理処分に参与する権利を生むわけで、このような団体的な所有形態を「総有」という概念で捉えておきたい〔我妻栄編集代表 1973：602〕。

ところが実際には、人々はこのように把握した土地所有について、時に矛盾したような発言する。すなわち、ある人は「土地は大首長に属している」といい、ある人は「土地は村人のものである」というふうなのである。前者の言い分は、平民から収穫物の一部を徴収する首長の権限に照準をおいた発言である。後者の立場は、村人に自由な開墾権が与えられているばかりか、首長といえども村落内の土地を他村の人と交換したり、売ったり勝手に処分することが許されていないという事実を念頭においている。これら二つの立場のうち、後者の発言の内容は大切である。とくに、首長が村落内の土地に対する処分権を認められていないという意見は、土地所有の本質を考えると重要である。とりもなおさず、土地は基本的には村落の総有に帰すことを告げているからだ。以上の議論を念頭において土地の地目毎に、さらに詳しくみておきたい。

1) 畑

基本的に村落の共有に帰すというとき、その土地は焼畑可能な山林であり、また狩猟地を指している。総有であると規定する他の理由は、一度開墾された畑でも再利用されず放置された土地については、以前の使用者に断りもなく他人の利用が可能であるという事実に基づいている。現に使用中の焼畑地は、もちろん用益権がその使用者に設定されている。一般的に言って焼畑地は二・三

年で地味が衰えるので、そのつど新しい土地の開墾が必要になる。古くなったかつての耕作地をほったらかしにしていると、萱などが繁茂し、土砂も流失し、畑は傷みやすい。こうした土地は、他人の自由なる用益に任することが可能である。

しかしながら、生活の基本をなす焼畑地が村落の全構成員の総有に帰すといっても、若干の土地には私的所有権が設定されている。その土地は、特別の名称を持っている。すなわち、

- 1 モモア momoa
- 2 トゥーブ tuubu
- 3 タチラン tatilan

以下にそれぞれの説明をしてみよう。

① モモア

後来の首長が移住以前に持っていた、畑を含む土地はこの村の領域内の山中にも点在している。このような土地はモモアと呼ばれる。後来の首長にはいぜんとして私有権が設定され続け、子孫に相続させることも、また婚資として役立てることも可能である。もっともこの種の土地は、村落の全面積に占める割合では僅かである。

② トゥーブ

およそ人が利用しないような荒地を開墾し、苦勞して造成した畑地を言う。平民でも所有することが可能で、子孫に相続させ、また婚資として利用することも認められている。しかし全体的にみてその面積は狭く、耕作地全体に占める割合も僅かである。

③ タチラン

水芋田のこと。山中には所々、自然に水が湧き出る小さな場所があり、そこに数坪程度の狭い「水田」を作り、水芋（里芋の一種）を栽培することが行なわれている。この水芋田からは一年にせいぜい200～300斤程度の僅かな収穫量

しか望めない。大首長にはその内の若干を貢納し、残りは所有者の自用が認められていた。この水芋田は完全に私的所有物であり、婚資として相手方に贈与することも可能であった。

2) 猟場

性差に基づく分業は顕著であり、たとえば刺繍が女の仕事なら、狩猟は男の仕事として、いまなお男たちは機会を見つけては狩猟に勤しんでいるのが現状である。猟の方法は多彩であり、犬を連れての日帰りの狩猟のほか、罾掛け猟、それに山焼き猟などがある。山焼き猟とは、今は廃れたが、萱っぱらを燃やし獣の通る道に待ち伏せし、弓矢、槍、そして鉄砲で射止める形式の狩猟である。罾掛け猟にも何種類もあり、村中で時期を決め、いくつかの組に分かれ、かなり遠方まで何日もかけて出向くことが、とりわけ旧慣時代にはしばしば行なわれていた。

現代では領域侵犯はやかましく言わないが、かつては猟場は一定していて、特定の組が特定の場所で猟に興じるというのが原則であり、いわんや他村のものが許可なしに村の境界線を越えて侵入することは許されていなかった。もし無断で侵入し発見されたときは、紛争に至ることもありえた。一つの村落は居住区、焼畑地、そしてその外延に広がる広大な山林から成り立っていて、他村との境界は稜線もしくは溪谷によって画定されている。この区画内が村落の猟場の外枠をなしている。

こうした猟場のうち特定の領域については、焼畑地でみたのと同じく、後来の首長が権利を留めていたものがあった。今となっては詳細は不確かとなっているが、それでも聞き書きで復元できたもののうち、代表的な猟場の名称を例示してみよう。冗長にはなるが、どのように猟場が利用されていたのか知る手立てになるからである。

アブラサン：

これは、後来の首長であったタリアロ家がかつて住んでいた土地の名称である。こ

のあたり一帯は専らその系統の獵場とみなされていて、仲間を結成して出獵することがあった。ここでの村人の狩獵は許可されていたが、その獲物の一部はタリアロに、そして他の一部は大首長に貢納していた。

タシヤオヤオバン：

後來の首長家のラピトアン家のもと居住していた土地。この系統の人たちは互いに組を結成して、しばしばここに出獵していた。村人がここで狩獵したとき、大首長家に対してと同じく、ラピトアン家にも獲物の一部を貢納しなければならなかった。

クラデン：

後來の首長家タマオロルの持っていた獵場。ここで村人が狩獵すると、やはり同じようにタマオロル家と大首長家に捕獲した獲物の一部を貢納しなければならなかった。

アーブサン：

後來の首長パウリシ家の獵場である。村人がここで狩獵し捕獲した獲物は、その一部をパウリシ家と大首長家に貢納しなければならなかった。

こうした性格の土地は随所に散在している。しかもたいていの後來の首長は、彼らがかつて居住していた土地に権利を留保し、首長たる權威を示している。その事実が、後來の首長たちがこの村では大首長の統率下に組み込まれてしまったといえども、なお首長たる格付けを失わなかった理由である。

3) 河川

山間部の溪谷には魚や鰻が豊富であり、彼らの日常生活にとって豊かな食料源を提供してくれる場所として、河川は重要であった。その河川は形状に従って語彙の上ではいくつかに分類される。そのうちでも、カラワヌ kalawanu (溪谷) とタアナヌ taananu (谷川) に関して、土地所有との関係でみておきたい。

① 溪谷

カラワヌとは溪谷という意味である。この村には日本統治時代に蜀口溪と呼ばれた溪谷がほぼ東西に走っている。この溪谷は漁業資源が豊富で、漁簾流しを始めさまざまな漁法が活用されてきた。その所有は、山林と同じく村落に帰し、大首長はここでの漁獲物の一部を徴収する権限を持っていた。

② 谷川

タアナヌとは溪谷よりも規模の小さな河川で、谷川とここでは訳しておく。漁簾流しは、その性質上、かなり広範囲にわたって毒を流すので、この谷川では禁止され、代わって釣針や網などを用いた漁法が中心となる。この谷川の場合の特徴は、溪谷と違って個人の所有権が設定されていたことである。川筋は何百メートルか毎に区切られて、それぞれの一区切りが、首長や平民を問わず村人の所有に帰していた。したがって売買が可能であり、また婚資として活用することもできた。漁獲量はさして見込めるものでなかったのも、大首長への貢納は必要でなかった。

さて、以上に詳述したのがコガダヴァンでの土地所有の実情である。若干の土地は個人所有が認められながらも、基本的には所有主体は村落であり、そして大首長は収穫物の一部を徴収する権利を持っていたこと、これらが大きな特徴として指摘されるのである。

(2) 貢租

すでに繰り返し触れてきたように、収穫物の一部は大首長に貢納されねばならない。その貢納物は現地語ではソアルプ soalupu と呼ばれている。ここでは貢租と訳しておこう。この村の貢租については、すでに『番族慣習調査報告書』に記載がある。それによると [臨時台湾旧慣調査会 1921: 334]、

農 租 頭人ハ親シク部下ノ各戸ニ就キテ、之ヲ取ル。一戸ヨリ米一「ブチュカ」
(約五合)ヲ取ル。粟、芋、樹豆等ハ之ヲ取ラズ。

獵畜租 (1)獵租ハ鹿、猪及熊ヨリ取ル。毎頭後脚ノ上腿内側ノ肉ヲ取ル。此ハ大頭人

取テ他ノ三小頭人ニ分ツ。羌及羊ヨリ獵租ヲ取ラス。

(2)畜租ハ豚ハ其局所ヲ選ハス単ニ一塊ノ肉ヲ取ル。

(3)漁租ハ獲物多ケレハ五六尾少ケレハ一尾ヲ取ル。此ハ頭人方ニ持参ス。

粟および芋の農租を徴収しないという記述はいささか問題が残ろう。だが、貢租に関する説明は基本的には事足りている。一方、貢納すべき相手、とりわけ中首長が獵租を受け取る権限を持つ例はこの記述では書かれていないが、その詳細についてはすでに筆者は述べておいた。だが、たとえ中首長が貢納の一部を受け取る場合があっても、基本的には平民は大首長へ貢租を差し出す。それらは、米を中心とした農作物、狩猟の獲物と漁獲物、これら生活の糧となる品々の一部であった。

農作物や狩猟・漁労の獲物などを貢納する以外に、村人から大首長へさまざまな物品が届けられた。たとえば結婚式のとき、常に大首長の参加は望まれていたし、その際、豚肉や頭飾りの花輪が大首長に捧げられた。訂婚にさいしても酒・餅・檳榔などが大首長の家に届けられ、そしてその集会への参加が大首長には要請されもした。いわば冠婚葬祭を通して、村人と大首長との間には常に関係が維持されていて、その結果、何らかの贈り物が大首長の手元に集積されていくことになる。

しかしながら、このようにさまざまな機会を通じて集積された品物は、折にふれ、必要に応じて村人に再分配されていく。たとえば、狩猟の獲物があったとき、その晩は、狩猟に参加しなかった村人たちも大首長の家に集合し、そこに集められた獣肉の饗宴を楽しんだ。米や粟については、祭祀の度に大量に酒を作って村人に振舞い、消費したりした。あるいは、その年の不作だった人に対しては、米や粟の援助が大首長の貯えの中からなされた。こうして結局のところ、大首長の手元に集積された余剰生産物は村人に分配され、全体で消費されるよう仕組まれていたのである。冒頭に記した余剰生産物の再分配に采配をふるう人、つまり彼がルカイ族での大首長である。

実到大首長は多忙である。さまざまな行事に顔を出さねばならないし、その

さいには手土産を用意しなければならない。青年のバレーボールやバスケットボールの試合には、飲み物でも差し入れ、観戦に出かける。地方議員の選挙があれば、選挙事務所の設営にも協力し、時として酒食の接待もしなければならない。これはたいへんな経済的負担だが、そうした気前のよさが名声を生む下地をなすのである。

大首長は汗水垂らして野良仕事に専念することはない。とりわけその娘だと、労働に精を出すという姿にはおおよそ程遠い。村人と一緒に野良に、あるいは川に行っても、それはピクニック気分の参加であって、決して泥まみれになることはなかった。この優雅さは大首長の特権である。他人からの束縛を受けず、これほどまでに余裕を享受できる特権を大首長はもっており、こうした点からみると、大首長はまことに恵まれた存在ということになる。

5 地位上昇への舞台装置

(1) 配偶者選択の過程

身分制社会の基礎は配偶者選択の過程にある。自己の地位を維持し、あるいは上昇させるためには、配偶者は絶対的な標的であり、そのための選択にあたってはさまざまな戦略が練られる。リーチによる有名なカチン族の記述誌は、その光景を鋭く描出している。リーチは述べている [Leach, E. 1961 : 84 (訳 1974 : 150)]。

カチン婚姻体系を支配する最も一般的な二つの原理は次のようなものである。第一に、男性は彼よりも下の階級との結婚を避けるためにあらゆる可能なことを行なうこと、第二に、彼の娘の婚姻から最大限の利益——婚資でも政治的利益でもよい——を得ようとするのである。

カチン族では、人の身分は生まれによって決まる。それだから婚姻は人の身分を上昇させたり、下降させたりする道具的存在となる。ルカイ族においても事情は同じである。ここでは夫方居住婚、長男相続が優先的な規則となってい

るので、女は婚出しなければならない。この婚姻規則に身分制度が重なり合い、社会秩序の根幹が作り上げられていく。結論的に言えば、男の家の格はその配偶女性の生まれた家の格に左右され、その女の家格が自己より上だと、男の家の地位は上昇し、以下だと下降する。もちろん、大多数の村人は格の上昇を願っているから、それに適した作戦をたてる。大願成就に至るためにはそれなりの努力が必要で、またその願望を達するには経済的な裏付けも必要である。

結婚に至るまでの過程を少しみておきたい。予備的折衝、婚約、そして結婚式、さらには初生子儀礼と続く一連の手続きは、儀礼的な贈答慣行を伴いながら、駆け引きの世界を作り出している。最初の駆け引きの場面は、パツグル patsugulu と呼ばれる「財産見せ」の慣行であって、それは婿側が婚資を嫁側に見せる内容をもつ。男の家では、首飾り、肩掛け、着物一式、トンボ玉、山刀など、おおよそめばしい婚資を並べ、自分はこれほどの財産を用意することができた、と誇らしげに嫁側親族に見せびらかす。嫁側は、それらの財産をみて、品評を下し、時としてなん癖をつけ、そして多くの場合はさらにたくさんの財産を要求する。まさに駆け引きと面子の舞台である。婿側は相手の足元をみて婚資を吊り上げようとする。戦術に長けた人なら、相手の財産状況を推し量り、かつての時代なら、水牛など高価な財産をも承諾させることができた。そして一度承諾すると、水牛だけでは耕作できないといって、農具一式をさらに供出させる凄腕の人物もいた。婚資のやりとりは駆け引きであり、与える側としてはけちという悪評が立たないように、面子を気にしての戦いを強いられたのである。

談合が成立した後、正式に婚約が取り結ばれ、そして程なく結婚式が盛大に繰り広げられる。その時までには婚資が婿側から嫁側に贈られるが、その婚資の額は当事者の個々の家の財産状態とともに、その家の属する身分的序列関係に左右される。伝統的時代の基本的な婚資には、山刀、毛布、衣服、頭飾りなどの装飾品、一頭の豚、檳榔や菓子・嗜好品が含まれているが、財産家になると、若干の不動産を含め、かなり高額的生活用品が贈られる。さらに首長家との間に婚姻関係が取り結ばれたときは、相当な規模の婚資が必要とされる。

まずは壺。とりわけ百歩蛇の形象の描かれている壺は、特別視され、最高の貴重品と目されている。百歩蛇が人間の先祖の生まれ変わりという信仰は広くこの地域一帯に流布しているが、この伝説からわかるように百歩蛇は神聖とされ、殺傷さえも禁じられていた生き物である。その蛇の描かれた高価な壺には小さな穴が空いていて、呼吸をしているとされ、その壺自身、先祖の依り代と考えられていた。果たしていつごろ、誰が制作したのか不明だが、首長家には代々この壺が家宝として受け継がれていた。そしてこの壺は、首長家が絡む婚姻には婚資として登場するのが常であった。

そしてトンボ玉。ビーズ状に束ねた、この艶やかな色彩のネックレスは、第一級の装飾品であり、祭祀の時は競って身に着けた代物である。不可思議な力を発揮するかのような神秘性に富むこの装飾品が、いつごろから流入してきたのかは、まったくわからない。しかし、それゆえにこそ、それを所持しているだけで人々の羨望的になるに十分である。このようなわけだから、首長絡みの結婚には、トンボ玉もまた主役として登場することになる。

嫁方に贈られた婚資は、ただちに使用されることはない。それが完全に嫁方の裁量に委ねられるのは、最初の子どもが生まれた後になされるサパスタルク *sapasitaluku* の儀礼を終えてからである。嫁方親族が打ち揃い、婿方へ出向き、そこで宴を張るというこの慣行は、子どもの出生をもって婚姻が完全に締結されたことを告げる儀礼である。それゆえ、この儀礼の後、嫁方は安心して婚資を使うことができる。反対に、もし子どもが生まれないうちに離婚という事態になったとき、その婚資は返されねばならない。いうまでもなく、婚姻が完全には締結されていなかったからである。婚資支払いに関しては、以上に述べたように複雑な社会関係がつきまとっている。

さらにその上に身分違いの結婚が行なわれると、婚資の額は一挙に跳ね上がるし、首長制を維持するための特別な仕掛けが働く。もし婿が平民で、相手の女が首長系統に属すなら、婿側は自己の体面を保とうとして多額の婚資を支払うのがふつうである。さらに加えて、すでに紹介したサボタイアガルと呼ばれる特別財を提出しなければならなかった。その民俗語彙のアガルとは「上がる」

の意味であり、内容本位に考えてここでは「上昇財」と訳しておきたい。

「上昇財」を構成するもののうち、先に挙げた聖なる壺、トンボ玉は最も好まれる品物であるが、その入手は非常に難しく、平民にとってはなかなか手にすることができない品物である。そのため、山刀、腕輪その他の高価な装飾品で代用されることがある。とはいっても、それらでさえ高価であるため、財産の乏しい平民が首長系統の娘と結婚するのは難儀である。こうして、かなりの資財を貯えた者だけが、そうした娘との婚姻が可能となる。

そのとき支払われる「上昇財」は、最終的に首長家に吸い上げられる。もし、結婚相手の娘が、中首長家の分家筋にあたるなら、その「上昇財」は婚資とともにいったんはその分家筋にあたる娘の家に贈られ、その後娘の家は「上昇財」のみを中首長に贈る。あるいは、その娘の家が大首長との関係を好転させようと作戦を練れば、さまざまに張り巡らされた親族関係の網の目を通して大首長にまで、その「上昇財」は登りつめる。かくして首長家は宝玉を手中に納め、村人に対してその権威を誇示することができたのである。そして平民にも、好ましい結果がもたらされる。平民もブツアカン・ココオロの地位へと上昇するからである。

同じ方式は、首長系統とはだいぶ遠縁になった下級の「中間層」、つまりブツアカン・タリアライにも当てはまる。彼らは、「上昇財」を提出し、より上位の家格の娘を手に入れば、それだけその地位は上昇するからである。

しかし、この逆は惨めである。ブツアカン・ココオロに属す男が平民の娘を迎えれば、それだけ地位は下降する。男は婚資を支払った末に、その地位が低下してしまう。それだから男たちは下の地位の女を貰いたがらない。そうした女を貰わざるをえない男とは、貧乏のため、多額な婚資を支払えない人たちである。その結果とは言えば、彼らは比較的質素な婚資ですむ平民階層と結婚せざるをえなくなる。貧乏すれば地位は下がり、地位が下がれば一層貧乏になるという悪循環が、そこには待っている。

村人の家は、一戸ごとに格付けが微妙に異なっている。その評価は相対的で、また長い年月をかけてみれば、流動的である。村人は、たえずそうした評価に

気を配っている。評価づけがとりわけ意識に上るときは縁組に際してであり、人々は相手の状況を凝視し、少しでも上の地位から女を得ようとし、配偶者選びを行なう。さしずめ結婚とは人生ゲームの出発点であり、その人生とは、他人との差異を求めて一喜一憂するシーソーゲームにはならない。

(2) 名は体を表す

人々は必ず自己の名前を持っている。そしてその名前も身分制と密接に関連している。特別な例を除いて、首長系統の名前を平民が名乗るのは避けられているし、もしそのような名前をつければ、周囲から冷ややかな目で見られてしまう。その特例とは次のような場合、すなわち、平民が大首長の家で永らく小間使いをしていて功績があったとき、その時にたまたま子どもが生まれたら、その子に大首長が直々に首長系統の名前を授ける場合である。その子にとって、それはたいへん名誉なことである。

しかしながら、ほとんどの場合、名前は身分制と関連してつけられる。平民身分にはそれ相応の名前があり、首長系統には彼らだけが使う専用の名前があって、両者の違いは歴然としている。それだから、名付けとは身分階層を表現する手段ともいえる。「名を体を表す」とは、まさにこの社会の社会関係を言いあてているような諺である。

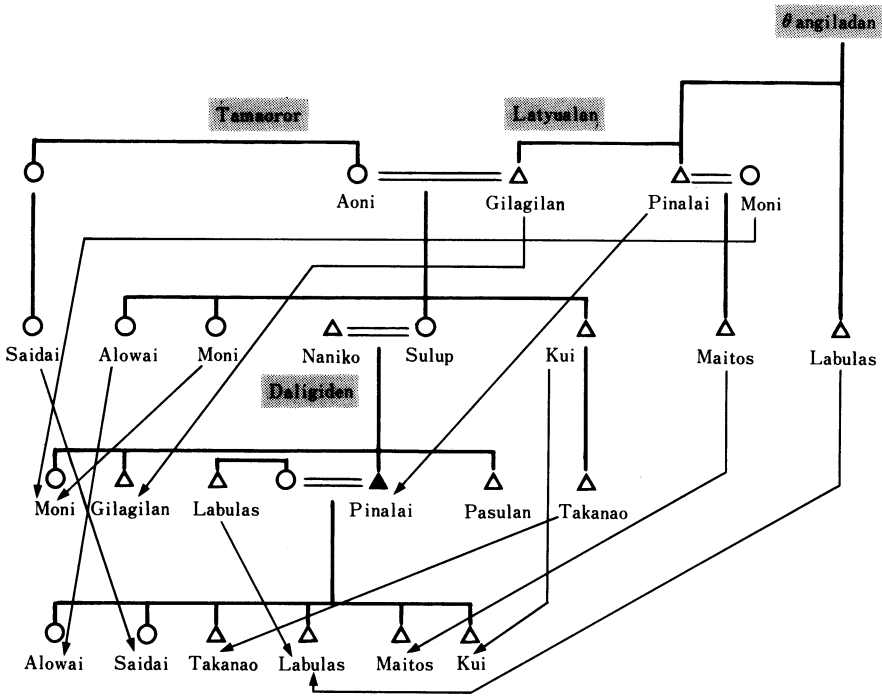
名付けには一定の規則があり、絶対に父母と同じ名前をつけてはいけない。そして、父母を除く上位世代の親族関係者のうちの誰か一人の名前を継承するのが基本となっている。この村の親族関係の基本は、長男相続、夫方居住婚を制度化しているものの、双側的であることを特色としている。すなわち、父方、母方双方とが区別されるような親族範疇はないし、出自制度も存在していない。このような親族観念を反映して、上位世代の名前は父方からでも母方からでも採用してかまわない。とはいっても、名前の選択は無造作に行なわれるのではない。

名前の継承には身分制秩序の下で生きる人々の人生観が如実に反映されている。人々は、命名という行為にも上昇志向の態度をはっきりと示す。自己をよ

り大きく見せるために、正確に言えば、生まれ出た我が子の格付けを高めるために、できるだけ高位の、そして名声を持った過去の首長の名前を親族関係者の中から選び出し、命名しようとする。その営みの背景には、首長との関係づけを特に強調し、自己の格付けを高めようとする处世術が見えてくる。

次に示す命名の実例は、首長制のあり方を考えるのにまさに相応しい例である。より大きく自己を見せつけるため、高い地位の人を求め、その名前をつけた例である。

〔事例 1〕 ダリギデン家の場合 (1)



第二図 名前の継承例

図2に示したようにP (Pinalai)氏(▲印)は四人兄弟であった。長男を除いた三人はすべて母方から名前を継承している。Pの家名ダリギデンは代々、父を通して受け継がれてきた。その先祖は、後来の首長家の分家筋にあたる。だが、その後来の首長家は、中間層、そして平民から嫁取りをして格は降下し続け、はなはだしく没落してしまった。それに比べると、母方は草分け筋にあたる大首長のサギラダン家の直接分家(ラチュアラン家)にあたり、格式は父方よりはるかに上である。名前の継承には、こうした格付けへの配慮が働いたという。

長男だけは異質に見えるかもしれない。しかし、これも格式を考慮してのことであった。すなわち、隣のツォウ族に有力な勢力者パスランがいた。その妹が隣村に嫁し、その産んだ娘が当村のサギラダン家に嫁いだ経緯が昔あった。やはり、母方の名声に牽かれた例である。

[事例 2] ダリギデン家の場合 (2)

このP氏は四男二女に恵まれた。やはり没落首長系統よりも、権勢家の母方の大首長家に関係する人たちから名前を選んでいる。一見すると、三男だけは異質に見えるかもしれないが、P氏の妻は隣村の首長家出身で、格式はかなり高い。さらにこの名前を持つ者は大首長系統にもいるし、こういうことが勘案されて命名された。長女はタマオロル系統から名前を受け継いだが、その家は大首長に次ぐ有力な中首長家である。こうしてまでも、父方の没落首長系統は無視され続けた。

名前の選択はむやみにすべきではないこと、いったんつけられた名前は変更できないこと、こうしたことを考えると、名前には重々しいほどの社会的意味が込められているのがわかることだろう。見かけをよくするための努力は人生の最初の段階から始まっていたのである。

6 おわりに

最初に述べたように、首長階層と平民階層とでは、首長には紋章や装飾上の特権が与えられているなどのさまざまな点で、明確に識別されていた。それらの特権は地位を表示する象徴としての役割を帯びている。これに関して、さら

にいくつかの補足的事柄を記しておきたい。

世界の多くの地域で、服飾そして装飾品はもっとも一般的に身分差を表現する手段として使われるのだが、ここでも同じ傾向は指摘できる。祭宴のときの服装を取り上げてみると、旧慣時代では首長は百歩蛇の図柄を刺繍した衣装を身につけ、平民にはその着用を許されていなかった事実にその典型をみることができだろう。しかし、祭宴のときに着用する装飾品はそれだけにとどまらない。

山中にはアリシと呼ばれる鷹がいる。この鷹はふつうの鷹と違って神聖視されている鳥である。伝説では、百歩蛇が老令になるとだんだん太く、短くなり、洞窟に入って動けなくなるという。そうしているうちに羽根が生え、空に向かって飛んで行き、そしてアリシになるのだという。このように神話的な意味が込められているので、その鷹は捕えても食べてはならず、足だけ地面に出して頭と胴体は地面に埋めるという特別の扱いが必要であった。ただ羽根だけは貴重で、装飾品として珍重されていた。祭宴のとき、首長はこの羽根を頭に着け、自己の気高さを自慢することができた。ただし平民でも、首尾よく首刈りに成功した人、あるいは熊を捕まえた人なら、特別にその勇気を評価して頭に着けることができた。とはいっても、首長と平民では着ける位置が異なっている。首長は頭の前に着けるが、平民は、若者なら頭の後に、年寄なら頭の右側にと場所が決まっていた。

アリシの羽根を着ける理由ははっきりしている。この聖なる鳥を捕獲したことはすこぶる名誉なことであり、その上にたくさんの武勇をたてたのだから、その勇気を讃えてのことである。それだから、その羽根は個人の人格を上げ、人目をよくするのにもっとも相応しい装飾品といえる。しかしなお、首長と平民とでは飾り付けの作法が違っていたのである。首長はいつでも平民との違いを意識しなければならなかった。

他人の体面を気にかける風潮は、人びとの日常の行動のなかにも現われている。たとえば、首長系統に属し政治的にも有力なある男が、酒瓶を袋に入れず、むきだしのまま持って酒を買いに行く羽目になったとき、彼がいったことばは

「これじゃ体面がなくなる」ということだった。そんな買物姿が人目に触れたら、恥ずかしいというのである。この表現の中には、体面、面子、おおよそ外面を気にする社会の一面が滲み出ている。このような例もある。筆者の調査スタイル、すなわちサンダルに短パン、それに破れたランニング姿、そして地べたに坐って酒を飲み合うという格好は、同じ台湾でもタイヤル族やアミ族の村では何とも思われなかったし、むしろ親近感を村人に呼び起こしたほどだったが、ここでの反応はそれらの社会とは逆であった。後で聞いた話では、その姿はあたかも乞食のようであったらしく、面子を考えない人間と映ったそうである。

万事こうして体面と面子が秤にかけられ、人の評価が定まっていく。すべての人間には「格」があり、人々はその格が下がらないように絶えず配慮を怠らない。面子を失わないことは、何よりの美德である。すべてにおいてがこうして秤にかけられ、人生のシーソーゲームは進んでいく。だが、大首長だけはこの人生ゲームに参加しない。大首長は他のいかなる人たちとも異なった存在である。大首長はすべての人たちの頂点に立つ存在で、その地位は不動であり、すべての権威がこの大首長に集中している。その権威の正当性は村落創建の神話に基づいていて、その地位は万世一系的に長男筋に継承されていく。人々からすれば大首長は求心的な存在で、彼らは何かこの権威との関連を求めて奔走するのである。

しかしながら、民衆は無条件で首長への信頼感を抱いていたわけではない。多少なりとも大首長との関連が求められるなら、人々は競って上昇気流に乗ろうとするだろうが、その上昇への道筋が完全に断ち切られている人たちにとっては、大首長とはさほど身近な、親しみやすい存在ではない。そればかりか、そうした平民の胸の中には首長への不満が潜んでいる。曰く、「大首長はあちこちに妾をつくり、勝手気儘である。そうした首長とは違って、野良仕事で汗水垂らして働くのは、平民たちである。」実際に大首長には愛人をつくるのが黙認されていて、その結果、「非嫡出自」も少なからず存在している。平民からすれば、こうした首長の行為も嫉みの原因になるのである。

その昔、この村を創建したのは、サギラダン家、つまり大首長家であった。だが、最初に紹介した伝承でみるように、この村を「最初に発見」したのは、その大首長に仕える平民であった。その平民の子孫筋にあたる人は、首長家が語るこの創建伝説とは若干違う内容の話を、実は伝えてきた。

昔、パーツガンに住んでいたとき、この地まで狩りにきた。しかし犬は帰ろうとしないので、ここに住むことにした。昔は首狩りがあって恐かったので、サギラダン家を呼んで「一緒に住むなら首長にしてあげる。食料も与えよう。一緒に仕事をして、荷物は運んであげる」と約束した。そこで、大首長家を頭とするコガダヴェン村ができた。

この種の神話伝承とは自己の存在の正当性を説く話だから、身分階層にしたがってさまざまな異伝が作り出されていくのは不思議なことではない。大首長家で聞かれた話は、首長の権威の正当性を語る内容であった。その話は、村落創建の由来に関わり、大首長家の決断で村落が創建されたという内容であった。この話は、多くの人たちに公認された語り物である。これに対して、ここで紹介した平民の語る伝承は、基本的にはそれと同じだが、いくつかの違いが見いだされる。平民の伝承が説きたかったのは、なぜ村落の統制権を大首長に授与したかということである。その説明では、権限の譲渡は自己を防衛するため、であった。

この地元民の説明は、何やらナンビクワラ族でのレビ＝ストロースの解説と似ている。ナンビクワラ族の首長は気前がよいばかりではなく、集団の安全のために骨惜しみせず働く人物である。そして、その首長は一夫多妻の特権を持つのだが、そのお返しに、危険に対する保証を提供する義務をいつも持っている。それだから、人々は、「ある優越を首長にゆずった代わりに、首長が完全に群れの利益と安全を守ってくれること」を期待している [Levi-Strauss, C. 1955 (泉靖一訳 1967 : 552)]。

ルカイ族平民の語る、首長なる存在が自己の安全と引き替えに作り出された

と説く見解が、遠くブラジルのナンビクワラ族と一致するのは、奇妙な符合である。だが、これは奇妙な符合に留まるものではない。身分秩序が成立する根源には、生存のための人々の安全性の確保の問題が潜んでいるからである。だが、ひとたびその安全性の義務を首長が果たせなくなると、その首長は地位を保てず、追放されてしまうことさえありえた。台湾諸族でそうした例がかつて見られたことは、すでに紹介しておいた。もっとも、コガダヴェン村では、こうした危機的状況があったわけではない。しかしながら、面子を絶えず気にかけ、上昇気流に乗ろうと絶えず周囲をおもんばかりの人たちの群れとは別に、平民階層の胸のうちにはそうした亀裂を生み出していく忿懣が潜んでいたのである。もっとも、この忿懣がどういう展開をしていくのか見定めることもなく、ルカイ族は日本、そして中国による統治をうけ、そして彼らの意志とは違う歴史の世界に投げ込まれてしまった。とはいえ、そうした歴史の変転の中にあっても、醒めた目でもって、もし不公平な現実が起るならばと、首長たちの動向を凝視する人たちも社会の周辺にはいたのである。

身分制の頂点に立つ首長も、このような周辺村人の潜在的凝視には背を向けることができなかったはずである。首長の権威とはいっても、それは究極的には村人の総意に基礎づけられていたからである。この意味では、仮りに支配ということばを使ってよければ、首長の支配権とは村人の総意に基づいたもので、それゆえ、いささかのことば遊びをもってすれば、支配する首長とは支配される首長でもあったことになる。

引用文献

- 蔣斌 1983 「排湾族貴族制度的再探討」『民族學研究所集刊』 55。
 陳奇祿 1953 「屏東縣霧台村民族学調査簡報」『台湾大学考古人類学学刊』 2 : 17-22。
 Hau'ofa, E. 1971 Mekeo Chieftainship. *The Journal of Polynesian Society*. 80-2 : 152-169。
 ——— 1981 *Mekeo*. Canberra : Australian National Univ. Press.
 謝繼昌 1966 「台東縣大南村魯凱族民族学調査簡報」『台湾大学考古人類学学刊』 27。
 笠原政治 1988 「台湾山地社会史の風景」 須藤・山下・吉岡編『歴史のなかの社会』 東京 : 弘文堂。

- Leach, E. 1961 *Rethinking Anthropology*. The Athlone Press. (青木保・井上兼行 訳『人類学再考』1970年、東京：思索社)
- Levi-Strauss, C. 1955 *Tristes Tropiques*. Paris: Plon. (泉靖一 責任編集『悲しき熱帯』＜世界の名著 59 マリノフスキー・レビ=ストロース＞所収、1967年、東京：中央公論社)
- Malinowski, B. 1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London : George Routledge & Sons. (寺田和夫・増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』＜世界の名著 59 マリノフスキー・レビ=ストロース＞所収、1967年、東京：中央公論社)
- 馬淵東一 1954 「高砂族の移動および分布（第二部）」『民族学研究』18-4. (『馬淵東一著作集』第二巻、1974年、東京：社会思想社)。
- 松沢員子 1979 「台湾バイワン族の首長の家」『社会科学（同志社大学）』26：1-40.
- 岡田謙 1944 『未開社会の研究』 東京：弘文堂。
- 臨時台湾旧慣調査会 1920 『番族慣習調査報告書』5巻ノ1. 台北：台湾総督府。
——— 1921 『番族慣習調査報告書』5巻ノ4. 台北：台湾総督府。
- 台北帝大土俗・人種学研究室 1935 『台湾高砂族系統所属の研究』(本編)台北：台北帝大土俗・人種学研究室
- Sahlins, M. 1958 *Social Stratification in Polynesia*. Seattle and London : Univ. of Washington Press.
——— 1963 Poor Man, Rich Man, Big-Man, Chief : Political Types in Melanesia and Polynesia. *Comparative Studies in Society and History*. 5:285-300.
- 石 磊 1971 『筏湾——一個排湾族部落的民族学田野調査報告』 台北：中研院・民族学研究所。
——— 1976 『台湾土着血族型親属制度』 台北：中研院・民族学研究所。
- 末成道男 1973 「台湾バイワン族の＜家族＞」『東洋文化研究所紀要』59：1-87。
- 我妻栄編集代表 1973 『新法律学辞典』 東京：有斐閣。
- 王長華 1985 「魯凱族階層制度及其演變」『思與言』23-2：137-152。
- 衛惠林 1960 「排湾族の宗族組織與階級制度」『民族学研究所集刊』9：71-108。
1963 「魯凱族の親族組織與階級制度」『中国民族学報』3：1-18。
- 山路勝彦 1986 「タイヤル族の慣習法と贖罪、祭祀および共同体」『関西学院大学社会学部紀要』53号。
——— 1990 「台湾ルカイ族の家觀念」 竹田旦編『民俗学の進展と課題』 東京：国書刊行会。